

「あアら。ではお婿殿の方で、お氣乗り薄なので御座いますの」

「大ちがひ、婿の方は、猶さらだ。全く張り切つてゐるよ」

「オホ、、、、、、そんなら何も……」

「ところが、夫婦仲が如何に密よりも甘くてもだ、浅井久政、長政の父子と、この信長が、滅ぼすか滅ぼされるかといふ戦をだね、始めたら怎うする？」

「でも、浅井家とは、お平和のお話し合ひが出来ましたとやら」

「む、それは出来た。だから當分のうちは、妹も苦勞はあるまい。兄の口からでも何でも、讚めていゝ美しさだ。美しすぎる方へ、出来損なつた妹だ。おれとは、種も腹も、そつくり一つの兄妹だが、ほんたうに奇てれつな器量よしだから、むろん近江へもその評判は聞えてゐる。聞えてるから婿の長政、もう今頃は辛抱するのに汗の出るほど、張り切つてゐる。その長政がまた好い男だから、市姫も、十九といふ齡が手傳ふ。其方にしてまだ、覺えがあらうではないか」

「館！」

「花婿の俺が十五で、花嫁御寮の其方は十八」

「もう、そんなことより——お和睦が、いつ破れるやら解らぬやうな、そんな頼りない、あやふやなので御座いますの？」

「そこだよ、おれの話すのは」

「どうなんで御座いますか？」

「かうなんだ。つまり其方が結婚した齡よりも、市姫は一つ多いのだ」

「館と申したら！」

「その一つの、物を言ふ」

「なにを仰有いますのよう！」

「物を言ふから、まるで無條件に膠細工みために、密着してしまふ。おれと浅井の、平和が続けば、まことに結構だけれど、陣鉦太鼓、いざ鐵砲——となつた噺には、膠細工だから、さあ面倒だ。引張つたぐらゐでは、離れはせんよ。とゞの結末が、密着いたまゝで、火に焼かれるツてな事に、成るかも知れんから、さうなつたら、因果だ、と諦めて貰ふほか無いといふのだが、どうだ、これだけ喋れば大がいに解つたらう？」

「非常な美貌で、しかも成熟した十九歳で嫁ぐ市姫は、忽ち新郎の愛を、しつかりと掴むことが出来るだらうといふことは、濃姫夫人にも直ぐ頷かれた。けれども、素直にスウつと頭へ、這入りかねたのは、

（そんなら、あの美しい妹姫を囮にして、浅井を欺くお心なのか知ら？）



といふ、疑念が起つたからであつた。

「ではあの、こんどの御縁組みは、計略結婚とやら申す、それなんで御座いますの？」  
さう、夫人が訊くと、

「計略といふと——だいぶ違ふ」

と、信長は答へた。

「でも、先方に、油断をおさせになるので御座いませう？」

「ばかめ！ 浅井が油断なんぞするものか」

(三)

「濃姫」

と、信長は、思ひの外、眞面目な眼付きを、夫人の顔へ、凝乎と据ゑて、

「俺は決して、浅井を、欺しはせぬぞ。本當に俺は、心から平和を望んでゐるのだ。若し、浅井が俺の氣持を受け入れるならばだ、中原の平定を、志してはゐるけれど、何も、好んで隣國の大名を、ほろぼさうとは思つてゐない。俺の京都へ這入らうとする氣持が、浅井に解つて、それを浅井が承認

しさへすれば、つまり、俺の事業に浅井が協力して呉れさへすれば、俺は、あへて北江州を、自分の直接の領地にしようとは思はない」

信長は、更に、言葉續けて、

「だから、俺は、浅井を欺すのでもなければ、また、妹を、犠牲にすることを豫想して、この縁談を取り決めたわけではないのだ。ただ、不幸にして、浅井の方が、俺を裏切る場合は、さつき言つたやうに、妹は、氣の毒なことにならうし、これが、ならんとは斷じて言へないのだ。目出度いか、不目出度いか、解らないと、さう言つたのは、この意味からなのだ」

こんな言ひかたは、信長としては、誠に珍しいことだつた。こんなに、解り易く、諄々と、云つて聞かせるといふことは、この縁談について、餘程、綿密な考慮を費したものであつた。

いつもの、天馬空を行くやうな考へ方も、行動も、とらなかつた證據には、この縁談を纏めるための使者、不破河内を、浅井の小谷城へやつたことを、信長は詳しく、濃姫夫人に物語つて聞かせた。だが、物語つてしまふと、

「お類を呼べ」

と云つた。

やがて、お類が、腰元に導かれて、入側から、襖口に、その美しい顔を見せたとき、



「姫は、幾歳になつたかな？」

と、だしぬけに言つた。

「あら？」

「忘れたのか？」

「あの——？」

「何だ、鳩が鐵砲玉を喰つたやうに！」

「あの、確か、お十九かと存じまするけれど……」

「ばか！」

「あれ、違ひましたかしら？」

「そなたも、餘ッ程、カサゴ女郎だよ！ わはッは——」

と、信長はさも可笑しさうに、腹を抱へた。

「まあ、おひどいこと！ なんて、そのやうにお笑ひ遊ばす？」

「あッははは、なにを、と云ふがお類、姫と言つても、色々ござんすだ！」

信長がさう言つたので、濃姫夫人もつひ、可笑しさに、たまらなくなつて、吹き出した。すると、お類は、

「あら、奥方様までが！」

と、やゝ恨み顔を向けると、

「わたしにも、どの姫のことやら、さつぱり解らないのですけれど、でも、色々ござんす、などと仰有るのですもの」

と、またも、濃姫夫人は、

「オホ、ほほほ……」

片袖を、口に當てるのであつた。

お類は、ます／＼恨み顔で、だが、その顔を、今度は、信長の方へ向けて、

「ではあの、市姫様のお歳のことでは、なかつたのでございますか？」  
と、訊ねた。

(四)

「全く姫にも色々あるよ、姫貝、姫瓜、姫薊には棘があるけれど姫松小松は引き抜き易いし、ベツた  
ベツとべたつくのは、姫糊だし、お類の待つ正月は、姫始めだらう？ わッは、ははは……」



信長は、パツクリ、大きな口を押ツ開らいて、笑つたものだ。  
「あれまア、厭な館様！」

と、お類は覺えず顔を赫らめると、

「なアんだ、羞かしがるといふ、柄かよ。もういい加減、古てるくせに、のう、濃姫」  
「あアら、ほんたうに、いやらしい！」

「おやく、これも、お類の口か」

「もう御冗談を！」

と、濃姫夫人が言つた。

信長は、笑ひもせず、

「女が、いやらしいといふ時は、たいてい眉唾だからなア」  
「あなた、なにを仰有るのでございます？」

「だけど、かういやらしいのが揃つてゐては、俺は正月二日が、思ひやられるよ」

「二日が、どうなのでございます？」

と、濃姫が、美しい眉を、やゝ吊らせ氣味にして云ふと、

「新玉の二日は、飛馬始めだからなア！」



新玉





信長はさう云つたが、横道から戻つたといふ恰好で、  
「お類」

と、呼びかけた。

「はい」

「姫と言つたのは、そなたの産んだ姫のことだ」

「ええ？」

「徳姫よ」

「あら！」

「幾歳だ？」

「徳姫様なら、お十歳で御座います」

「なあんだ、まだ十歳か、仕様がないな」

「まあ！」

と、お類が云つたとき、

「オホ、ほほほ！」

と、笑つたのは濃姫夫人だつた。仕様がないな、と信長の云つた言葉が可笑しかつたのである。

「鉛細工みたいに、のびんものかなア」

「あら、おツほ、ほほほ！」

「オホ、ほほほ！」

夫人と、側室とは、聲を揃へて笑ふのだつた。

「おい、笑ひごとではないのだ。——形はどうやら、十二、三ぐらゐには見えるけれど、十歳では、  
どうもな」

「館様！」

と、お類が、こんどは不審さうに、眼を瞠つて、

「お十歳では、どうもとは、どうなのでございませう？」

「まだ、どうも、少々早いといふのだよ」

「あれ？ すこしお早いとは、なにがで御座いますの？」

「良夫を持たすにはだ」

「あら、まア！」

「館！」

と、濃姫夫人が、呆れた聲で云つた。



もちろん、産みの母であるお類の方の、驚きやうは、それ以上だつた。  
早や過ぎるのは、少々どころではない。信長の長女、徳姫は、三河の徳川家康の長男、竹千代と、いづれは結婚させるといふ約束が出来てゐた。つまり許婚の間柄であつたけれど、何分にも花婿たるべき竹千代も、やはり、同年のまだ十歳で、悪戯さかりの腕白小僧だつた。

(五)

信長が、吉法師といひ、家康が竹千代といつた時以來、實の兄弟仲よりも、親しくて、睦みかつた二人であつた。

桶狭間大戦の後、改めて盟約した織・徳同盟は、金銭の誓ひだつた。

その信長の長女、徳姫と、その家康の長男、竹千代との結婚こそは、まさしく、絶好な配偶であつて、同盟の錦上に更に、花を添へるものであつたらう。

だがしかし、十歳と十歳の少年と少女ではまだ、結合はせるには、あまりにも早過ぎる。

だから、濃姫夫人が呆れ、お類の方が驚いたことに、なんの無理があらうか。けれども、信長は、

「遣ツちまへ！—」

と、云つた。

獨特独自の、天馬空行だ。

「館様！」

と、お類が、叫ぶやうに云ふと、

「どうにか、なるよ」

獨りで決める信長へ、濃姫夫人が、

「もしえ！」

と、窘めるやうに、睨んだ。

だが、信長は、微笑んで、

「案じるなよ、あれで相當にお早熟だからな」

「でも、館——」

濃姫夫人が、さう云ふと、押ツかぶせるやうに、

「親の子だ。鬼子ではなささうだ」

「あアら、あのやうな！」



と、お類が、信長の顔を眺めると、

「そなたのことではないよ。親と言つたのは、父親のことだ」

「でも、お産み申しましたのは、類で御座いますものを」

「一本、参つた。御尤も、その通り間違ひなした。だけど、俺よりも、また其方よりも、先きだよ。先方なんだよ」

「え？」

「たいしたものだよ、全く、素敵なもんだよ」

「なにがで御座いますの、先様の？」

「先様のお早熟ぶりがだ、思ひ遣られるよ、何しろ、十歳の時の大小便で、猿の奴の度臆を引ツこ抜いた揚句が十三歳で嫁を貰つて、その嫁御寮の瀬名姫に、さつさと翌年、女の兒をオギヤアと、産ませた家康だ。この道にかけては、彼方は兄貴だよ、外のことでは兎も角も、こればツかりは信長——から意氣地がなくて、さんく／＼な顔負けといふ奴だ。その親の、名まで貰つた竹千代だ、嗚かし——だらうではないか？」

と、お類と、それから濃姫夫人の顔も、等分に眺め分けた。

濃姫が、十年あまりの過去のことを、思ひ出して、

「ほんに、さう仰有いますと、あの頃のことを、つひこの間のことのやうに、まざまざと懐しまれまするぞえ」

信長の、ぶつきら棒に云つた言葉が、夫人の女らしい情緒を、そそののだつた。

だが、その細やかな感情を、床しい思出を、いかにも信長らしい無遠慮さで、叩き毀すやうに、

「わツ、はツはは！」

と高笑ひをして、

「つひこの間のものか。二代目の竹千代へ、濃姫そなたの産み損ねた俺の子を、嫁にかたづけようてツんだ」

と、云つた。

しかし、産み損ねたと云つた言葉は、決して、信長の皮肉ではなかつた。寧ろ、夫人を愛し、いつくしむ天真の流露だつた。

(六)

信長が、



「深雪を呼べ」

と腰元に云ひつけた。

(おや?)

夫人と、側室とは、ちよいと顔を見合せた。

深雪も、やはり側室の一人で、三男三七丸の生母であつた。

けれども、この場合——市姫の近江へ輿入する話と、それから、徳姫を竹千代へ嫁がせようといふ話の場所へ、しかも、尻切とんぼの形で、深雪を呼び入れるのは、いくらか、そぐはない感じがしたのだつた。

濃姫夫人が、

「お這入り」

と、襖外へ聲をかけた。

衣すれの音。

深雪が現れて、お類の下座へ、やく離れて、坐ると、

「外でもないがな、三七の奴を、婿にやらうと思ふのだ」と、信長が云つた。

深雪は、自分の耳を疑つた。

「え?」

深雪ばかりではなかつた。夫人もお類も、覺えず、信長の顔を見つめた。

にも拘らず、信長は、まるで、何んでもないことを、云ふかのやうな顔付きで、

「婿と云つても、直ぐではないよ。ええと、徳姫が、十歳だとすると、奇妙丸が九歳だから、茶筌は八歳、同歳の三七の奴も、やつぱり八歳はあたり前だ。だから、何も泡を喰つて、婿口を探すにも及ばんが、そこがそれ、時と場合だ。たとひ八歳だからといつて、さう間諜ついでには居れん」と、云つた。

さア大變、かしら姫の十歳などは、何處かへ吹ツ飛びさうな氣配になつて來た。

夫人とお類は、再び、眼と眼を見合せたし、この場へ新入の深雪は、さながら、煙に濛々と閉ぢ込められた恰好だ。

まるで、言葉など出ないのである。

ところが、信長は、またも一つ矢繼ぎ早に、飛躍した。

「婿にやるのは三七だけではないよ。一緒に茶筌も、遣ツちまふのだ」

「ええ、な、なんで御座いますツて?」



と、お類が、思はず叫び聲を立てた。

「呉れてしまふのだ」

「まア、あの茶筌さまを御座いまするか？」

「さうだよ、怨みツこがあつては悪いからなア」

平氣な顔で、つづけて、

「なんせ、茶筌と三七は、同歳も同歳、あんまり外聞の立派な話ではないけれど、そなたと、深雪が同じ日の同じ刻限に、一緒くたに産聲を聞かせをつた、謂はば双兒だからなア、——これも親心さ」

「あらまあ！」

二人の側室は、同時に羞かしさうな媚態をつくつた。

お類は今年二十五、深雪は四ツ歳上の二十九。信長の側室生活は、どちらも既に十一年だ。しかも信長といふ人が人だから、それに侍いて来た兩人は、もう、恥ぢ羞らうといふこともなささうなものであるが、でも斯うあけすけに云はれては羞かしかつた。

その羞恥の態が、年増盛りへ爛熟した豊満な容姿をも、妙に若々しく、初々しい美しさに見せるのであつた。

信長が、

「茶筌は北畠へ遣るし、三七は神戸へ呉れる。どつちも伊勢だ」と、いつた。

(七)

同歳の八歳、茶筌丸と三七丸を、伊勢の國司の北畠館と、豪族神戸の家へ、婿にやると、信長がまるで、闇雲に云ひ出したので、その次男三男の、産みの母達は、互に顔を見合せた。

(まさか！ 御冗談でせうねえ？)

と、双方の顔には、弄はれてゐるのだと、囁き合ふ言葉が、表情の上に描かれてゐた。

だが、信長は、そんなことには頓着なしに、またまた、第三の飛躍をした。

「俺の娘子供は、みんな、まだ細ツかいからな、こんなときには、どう氣を揉んでみたところで、間には合はんよ」

と、云つた。

なんとといふ譯のわからない、突拍子もない云ひ方だつたらう。濃姫夫人が、濃艶な面差をちよいと擧めて、



「まア、何を仰有るので御座います。お戯ごとみたいな！」  
細ツかい一全く、かしら姫の徳姫をのければ、信長の姫達といふのは、みんな、まだ生れたばかり  
だつた。

それ等の姫たちの生母は、三人とも、二十歳前の若い妾達であつた。

「どうもな、母親ぐるみ呉れるなら、貰ひ手はないことも無からうけれど、それでは、母親の方が愚  
圖るだらうし、乳母だけ姫につけて遣るんでは、先方が、ダアを極めるだらうし、困つたよ」

「もしえ、もう大抵になさいませぬか？」

と、夫人がすこし、つんとした顔を見せると、

「怒るなよ、窮すれば通するでな、これこそ本當に一夜づくりで、すぐにも嫁の役が勤まる綺麗な姫  
を、一人、拵へるよ」

「もう、御勝手に、幾人でもお拵へ遊ばせ」

と、濃姫夫人が横を向いた。

「横を向いた濃、濃！」

「でも、わたくし、存じませぬものを」

「存じなくては、間に合はんよ。相手が要るんだからな」

「お相手は、お門が違ひは致しませぬか？」

「違ふのは、そなたの見當だ。そなたでなければ間に合はんのだ」

「あれもう、ほんたうに、御冗談は、わたくし厭でございます」

「ぶつ、さらさら厭ではない癖に。そなたさへうんといへば、今年十五の美しい姫が一人、ひよつ  
くり生れて、早速にも、甲斐の武田の、勝頼のお嫁御寮になれるのだ」

信長が、さう言つたので、

「あアら、お眞面目なのでございましたか？」

と、たちまち、夫人は向き直つた。

「ほう、偉い見幕ぢやの」

いとも朗かに微笑して、

「苗木の雪姫は、あれで、何處へ出しても、男に嫌はれはせんよ。あれを、養女に貰はうといふ寸法  
なんだ、どうだ？」

と、云つた。

苗木といふのは、美濃大名の一人だ。惠那郡苗木の城主であつて、勘太郎友政は、信長の妹婿だ  
つた。



で、その長女、雪姫は、信長にとつては骨肉の姪であるし、生れついでの名花、すでに蕾をほころばせて、馥郁と薫る牡丹の花耻かしい艶すがた。

信長は、この雪姫を自分の姫にして、それを武田信玄の家督ときまつた四男、四郎勝頼の若妻たらしめようと、さう考へたのであつた。

西の浅井、南の北畠、神戸へ、そして東の武田へ、結婚網を張りわたして、先づ平和主義で行かうといふのが、彼信長の腹だつたのである。

(八)

「武徳編年集成」に――

「十二月二十三日、織田信長の養女、甲陽に入興、諏訪四郎勝頼に嫁す。當春、信玄、嫡男の義信を廢し、その母の寵によつて、勝頼、嗣とならんことを察し、忽ち妹婿苗木勘太郎の女を養つて、勝頼に配偶を求む」と、記されてある。

これによると、恰度、雪姫を婚づけたのは、勝頼が家督をとることを、當込んでの結婚のやうに聞

えるが、それは、この文献の間違ひだ。

永祿八年のこの結婚は、勝頼の家督が決定してからの話合ひによつて、成立したものだつた。

右の引用文の中に、その母とあるのは、信玄の愛妾、諏訪の方のことだ。つまり、信玄に滅された信州の諏訪頼茂の姫で、愛子四郎勝頼は、その腹から信玄が産ませたのであつた。

信長の、四隣しよりんの郡雄ぐんゆうの中、最大の勢力はもちろん武田信玄であつた。

當時、信長に拮抗して、天下を競ふに足る實力者を、求めるならば、おそらくそれは武田信玄だつたにちがひない。

だから、信長も、戦はずして、京都に遣入ることを急ぐためには、甲斐との平和關係は、何よりも大切なことだつた。

そこで、重臣の一人、織田掃部助を使者として、甲府へ遣つた。そして、信長の口上として、

「四郎勝頼殿を、拙者の婿に仕りたいが、拙者の息女は、三河の家康の嫡男、竹千代と許婚の約束これあり、その下の息女共は、いまだ乳腐く、襦袢腐く、年のほどが釣合ひ申さず、よつて、拙者の妹婿、美濃の苗木勘太郎の長女、雪姫は、拙者の姪ながらも容色、心だて、共に一段と能き女子でござるゆゑ、拙者養女といたし、これを勝頼殿へ參らせたい」



と、申出でさせた。

信玄は、

「わが愛子、勝頼を、天下に若手の名大將、信長殿の婿にすること何より以て大悦の儀で御座ると、返事をした。

武田からは、美々しい結納の品々が、祝儀として岐阜の城に届いた。

華やかに、雪姫は、武田へ輿入れをした。

新郎勝頼、二十歳。

新婦雪姫、十五歳。

比翼連理の仲睦まじく、忽ち、雪姫は身重になつて、翌年の秋の始め、産み落したのは、謂はゆる玉のやうな男兒。

信玄は、相好を崩して、

「この兒は、信長の孫ぢや！ また勝頼の産ませた子だから、この信玄にも勿論、孫ぢや。どちらの筋目からいつても、武勇、器量は、世に越えたものだ。こりや祕藏の孫ぢや、祕藏孫ぢや！」

四十六歳の、嶋を負うたる猛虎が、富士の高峰を仰ぎみて、その日本一と、この愛孫とを、ひきくらべて、

欠



# 欠

歩くことまへが、ろく素ツほう出来なかつた。態のいゝ片輪といひたいが、實は、見た眼には、まざましく、まことに、無氣味な怪物だつた。

それでゐて、不思議なことは、劍をとれば、拔群な技があつた。

これは、親譲りで、決して不肖な子ではなかつた。父具教卿が、塚原卜傳の「一の太刀」の相傳者であつたことは、前にいつた通りである。

## (十四)

長くも、

人皇六十二代 村上帝の第七皇子具平親王が、即ち、北畠氏の御先祖だ。

具平親王の十一代の孫、北畠親房は、准后、従一位に昇つて、吉野朝の柱石と仰がれたことゝ、不朽の名著「神皇正統記」職原抄の著者であることは、あまねく世に知られてゐる。

後醍醐帝の建武二年、親房の三男、大納言顯能が、伊勢の國司に任ぜられて、府城を一志郡多藝——今日の多氣——に築き、その城山の麓に館を構へて、「多藝御所」と稱した。

その後代々、この「多藝御所」を襲稱して、八代具教に至つた。



府城を設けてから二百四十年に近かつたが、その間に、一度もおとさなかつた勢威は、紀州の熊野から、大和の宇陀郡、伊賀の國、志摩の國にも及び、兵力は、二萬五千と稱せられた。

だから、もしも信長が、まともに、この北畠を亡ぼさうとしたならば、それは實際、容易ならぬ仕事で、數箇年の歲月と、多大な犠牲とを必要としたであらう。

そこで、信長は、他の隣國に對すると同様に、結婚によつて、和親を結ぶ平和策をとつた。

この北畠の支族として、最も有力であつたのは、北伊勢の神戸家であつた。

北畠具教の大叔父、具盛が、舊家神戸を繼いで、神戸藏人と稱した。

三七丸が婚入したのは、この神戸家であつた。ちやうど、嗣子の男子がなくて、世嗣ぎの姫は、三瀨姫と云つたが、今年まだ十歳でしかなかつた。

花婿三七丸も十一歳で、婿としての資格は、むろん充分でなかつたけれど、花嫁三瀨姫の資格の乏しさは、尙更であつたらう。

介添へ役の猿面が、そつと、額をさすつて、獨りごちたことには、「どうもな、おまいごとぢや！」

全く、その通りであつた。完全な夫婦關係が生じたのは、恐らく數年後だつたに違ひない。

本家北畠館の三重姫は、婿、茶筌丸の年齢から云へば、熟しすぎてゐたし、この神戸の跡取り姫

の三瀨姫は、これはまた未熟すぎた。どちらにも、無理があつた。しかし、その無理を、無理なりに押し通さねばならなかつたといふのも、平和工作のためには、やむを得ない事情だつた。

これに較べると、信長の妹、市姫と、淺井長政との結婚は、年齢の點からは、何等の無理も不自然さもなかつた。

婚約の出來たのは、永祿八年——即ち、信長の養女、雪姫が、武田勝頼に嫁いだのと同じ年で、市姫十七歳、長政二十歳だつた。

ところが、この縁談には、越前の朝倉から、猛烈な故障の横槍がはいつた。

と、云ふのは、前にも述べたやうに、朝倉・淺井の同盟は、織・徳同盟のやうに、個人的な精神結合に基礎を置いたものではなかつた、けれども、その政略的、もしくは軍略的結合の固さからいへば決して、信長・家康の盟約の堅固さにも劣るものではなかつた。

だから、淺井が、織田と縁組みをするといふことは、朝倉にとつては、將來、どんな危険が、自分達の同盟に及ぶかも知れないことであつた。

この横槍に對して、淺井としては、斷じて、知らぬ顔は出來ない嵌目にあつた。——淺井家は、朝倉から大恩を被てゐたからである。



朝倉の横槍のために、この市姫と浅井の婚約は、殆ど、一時は破談にまで瀕した。だが、信長は、

「止めツちまへ！」

とは、云はなかつた。

云ひさうな信長が、さうは云はなかつたのである。

これはよくくの事であつた。

何といつても、近江は、京都への通り道である。いやでも通らなければ、美濃からは上洛が出来な

い。小谷の城が、敵では、武田、北畠が敵であるよりも、差し當つては、一層厄介だ。

(この縁談、どうしても纏めなければならん)

そこで色々の工作が施された。

けれども、話は、進んだかと思へば、繼が戻り、一進一退、同じやうな場所を往きつ戻りつ、三年を過ごして、永祿の十一年の夏まで愚圖ついでしてしまつた。





つひに、信長は、

「この縁組が相調ふならば、越前の朝倉とは、末永く懇親を結んで、いかなる場合にも、敵對關係には這入るまじ」

といふ意味の誓紙を、一札入れて、やつと覺がついた。同時に、朝倉へも、

「我等一身の微力を以て、たとひ天下を切從へ候共、朝倉義景殿には少しも異變申す間敷候」と、さう記した起誓を入れて、再保證をした。

かうして、縫れにもつれたこの縁談も、たうとう纏つて、市姫は二十歳の八月、岐阜から小谷の城へ興入れをして、長政と祝言の杯を交した。

新郎の長政が満足したことは、云ふまでもなかつた。浅井の家臣共も、

「聞きしに勝る御綺量ぢやのう」

「近國無双のお美しさだと云ふ評判も、こりや、話十分の一にも足りぬわす」

「芙蓉の顔ばせ、月の眉くらゐでは、まだまだピンと参らんぞよ」

「この上ピンときた日にはどうもならんぞ。身共などは、遠くから拜んだだけでも、何だかかう、體

の筋が、ゆるんだやうだ」

「若殿様は御果報者でいらつしやるよ」

などと、寄ると觸ると、噂し合つた。

行末は、いざ知らず、伉儷の夢まことに圓やかであつた。

すつかり有卦にいつた長政は、やがて、

「婿入りが致したい。不日、岐阜へ参上して、信長の館にお目にかゝり、御禮を申し述べたいと思ふがのう」

と、新妻の市姫へ、蘭燈の光ほのかな聞の睦言の隙に、さう囁くのであつた。すると、新妻は、

「ほんに、さうして頂けたら、どのやうに、兄者館も悦ばれませうほどに、わたくしから岐阜へ、さう申してやりまするぞえ」

と、答へた。

「岐阜の殿は、ほんたうに、お悦びであらうか？ 何となう、心許ないやうに存するが——」

「あれまあ、何を仰せられまする？」  
と、艶やかな流眄を、良人の臆へ送るのであつた。



市姫から、この旨を手紙で、岐阜へ云つてやつたが、さて、信長の返事は、どうであつたらう？

(十六)

浅井長政が、寝物語りに、新妻に向つて、信長は果して、悦んでゐるであらうか、何となく自分には心許ないと、さう私語したのは偽らない彼の告白であつた。

長政自身としては、實は、一も二もなく、この近國無双の美姫を自分の妻としたかつたし、従つていかに恩誼があるとはいへ、朝倉家から、自分の結婚についてまで、立入つた干渉を受けるといふことは、一種の侮辱のやうに思はれて不快で仕方がなかつたのである。しかし、自分の家が、朝倉の援兵によつて、椿坂で、兩佐々木・即ち六角、京極の聯合軍に勝つことが出来て、そのために、北江州半國の領主となる事が出来たのは、動かし難い事實であつたから、朝倉の意志は、飽くまでも尊重しなければならぬと云ふ父、久政の言葉には、逆らふわけにいかなかつた。

この経緯のために、どのくらゐ信長の感情を害したであらうと思ふと、幸ひに、欲しい嫁は、かうして貰ふことは出来たものゝ、嫁の兄信長には、會はず顔が、ないやうな氣もするのだつた。いや、それだけではなかつた。もつと、大きな不安は、

(あの、人を人とも思はないやうな、信長が、世間の評判の、コンコン馬とか、半狂人とか云ふ噂を途方もなく裏切つて、此方からの随分勝手な言分に對して、隠忍に隠忍を重ね、思ひがけない譲歩までして、自分に市姫を縁附けたといふ事は、果して、そこに何かしら、匿された陰謀があるのではなからうか?)

さう危ますにはゐられないことであつた。

弱肉強食。騙し打ちや、陥穽は、それこそ、なんでもない戦國の世の常であつたから、この不安は寧ろ當然なことだつたらう。

外にもう一つ、不安の原因があつた。

それは、信長に亡ぼされた美濃稻葉山の太守、齋藤龍興の夫人は彼、長政の妹であつたといふことだ。

だが、朝倉とは違つて、美濃の齋藤家には、浅井は何の恩も被つてゐなかつた。ただ、姫を縁附けたといふ關係だつた。もちろん、齋藤夫人の實家なら、深い親戚には違ひないけれど、浅井は冷然として、齋藤家の没落を傍觀した。

稻葉山の本城が、信長に攻められて、陥落した時、浅井は、齋藤龍興夫人の身柄だけは引取つた。しかし、長島へ逃れて、本願寺に庇護を求めた龍興その人へは、何等の援助をも與へなかつた。



してみれば、この點では、寧ろ齋藤の敵、織田に好意を持つてゐたと云へるので、なにも長政が、この場合、氣にかけるには當らなかつたが、疑心暗鬼を招くことになれば、濃姫夫人の實父、道三入道の、仇敵の親戚だつたといふ一事でもが、やはり、不安の一つの種になるのだつた。

ところが、意外も意外。長政の不安は、全くの杞憂に過ぎなかつた。

市姫夫人のところへ来た信長の返事には、

「我等方より望んで御縁者に、罷り成り候ふ上は、先づ先づ我等方より、小谷に参り、御目に掛り申すべく候。其後に當國へも御出なされ候へ。必ず必ず、我等いまだ参らさ候ふ前に、此方へ御出有る間敷候。江州いまだ半亂の國にて六角家の騒動、諸事に付いて心許なく覺え候。只能く能く分國のお仕置、肝要になされ候へ」と、あつた。



東京市神田區淡路町二ノ九  
配給元 日本出版配給株式会社

昭和十六年六月廿三日 第一刷印刷  
昭和十六年六月廿六日 第一刷發行

織田信長(第四卷)  
【定價金壹圓八拾錢】

著作者 東京市淀橋區諏訪町六 鷲尾雨工  
發行者 東京市日本橋區吳服橋二ノ五 神田龍一  
印刷者 東京市牛込區矢來町三六 本間淳三郎  
印刷所 東京市牛込區矢來町三六 清揚社  
製本所 東京市麹町區飯田町一ノ一六 河手製本所

東京市日本橋區吳服橋二ノ五  
發行所 春秋社松柏館  
電話東京 四八六一番  
電話日本橋 二六二四番

(小社發行書籍中亂丁、落丁等の不完全品がありま  
した節は御申出で下さる。早速御取替致します。)



小歴史 小説史 安土・桃山 (全十二冊) 鷲尾雨工著

# 織田信長

名取春僑畫伯裝幀  
B6判本綴美麗カバ付  
各冊平均四〇〇頁  
定價一冊壹圓八拾錢  
(十十四錢)

- 安土 第一卷 狐々馬  
 第二卷 人質交換  
 第三卷 桶狭間  
 第四卷 岐阜  
 第五卷 足利滅亡  
 第六卷 中原布武  
 第七卷 本能寺

安土・桃山！それは信長、秀吉の二名將二政治家によつて近代日本が統一國家への巨歩を踏み出した最も輝かしい時代だ。雨工の逞ましい歴史眼と、鋭い氣魄の創作力とは、この時代と人とをまさまじと描き出して歴史小説の一大エポックを作つた。

春 秋 社 版

- 桃山 第一卷 小牧陣  
 第二卷 聚落第  
 第三卷 淀殿  
 第四卷 桃山城  
 第五卷 關ヶ原

の機みを惱み抜く現代日本への絶好な贈り物と確信する。  
 全目次が示す如く、信長の狐々馬時代から桶狭間、中原布武を経て、本能寺の悲劇に終る迄のこの英雄の全生涯、小牧陣から關ヶ原陣に至る迄の、秀吉とその一家の興廢、而もそれは正確な史實を基礎としての小説だ。  
 文學は斯くありてこそ、眞の文學と云へよう。

春 秋 社 版

# 豊臣秀吉

名取春僑畫伯裝幀  
B6判本綴美麗カバ付  
各冊平均四〇〇頁  
定價一冊壹圓八拾錢  
(十十四錢)

小歴史 小説史 安土・桃山 (全十二冊) 鷲尾雨工著



著工雨尾鷲

# 吉野朝太平記

埋もれた南朝の英傑、楠正儀の忠を描いて、六百歳の後にその冤を雪ぎ、楠氏三代の忠誠を全からしめた大歴史小説！

(全六卷)

各取春徳畫伯裝  
各册四六判本綴  
平均五〇〇頁  
定價各壹圓五拾錢  
(千十四錢)

- 第一卷 楠正行と正儀
- 第二卷 正儀策謀ノ一師直の死
- 第三卷 直義の死—正儀の京都回復
- 第四卷 北朝三上皇の南遷
- 第五卷 再び復す帝京の地
- 第六卷 親房と尊氏逝く

古への國難を描いた本書がより大なる國難—日本及び東亞の歴史的一大轉換に際し崇高なる日本精神を示唆し、國民を根柢より覺醒せしむる機縁となつたことは、偶然とは云へその功績は頗る大きいと云はねばならぬ。構想の雄渾、描寫の精緻、作の中軸を貫くものは嚴肅な皇道精神であつて、讀むものは何人も此の尊嚴の前に襟を正すであらうし、若き英雄正儀と、老いたる准后親房の痛ましい悲劇の前には何人も涙を吞むであらう。

版社秋春

著工雨尾鷲

## 小説 北畠親房

日本歴史の至寶、北畠親房の神皇正統記は、この國の歴史に鮮血の光を注ぎ、北畠親房の功業を大に包圍した。此の書は、北畠親房の一生を、その歴史的背景に照らし、その人物の特色を、その時代の特色と共に描き出している。この書は、北畠親房の功業を大に包圍した。此の書は、北畠親房の一生を、その歴史的背景に照らし、その人物の特色を、その時代の特色と共に描き出している。

B6判本綴三六八頁  
定價一圓八十錢  
送料十四錢

## 劔豪物語

描寫の精細、氣魄の雄渾、而も劔を説いて人に徹し、人を描いて劔を極むるところ絕對に他の追随を許さぬ雨工の獨壇上である。

四六判美裝三三四頁  
定價一圓五十錢  
送料十四錢

- 次目
- 宮本武藏 伊藤一刀齋 荒木又右衛門
  - 塚原卜傳 神子上典膳
  - 多藝御所 柳生宗嚴

版社秋春





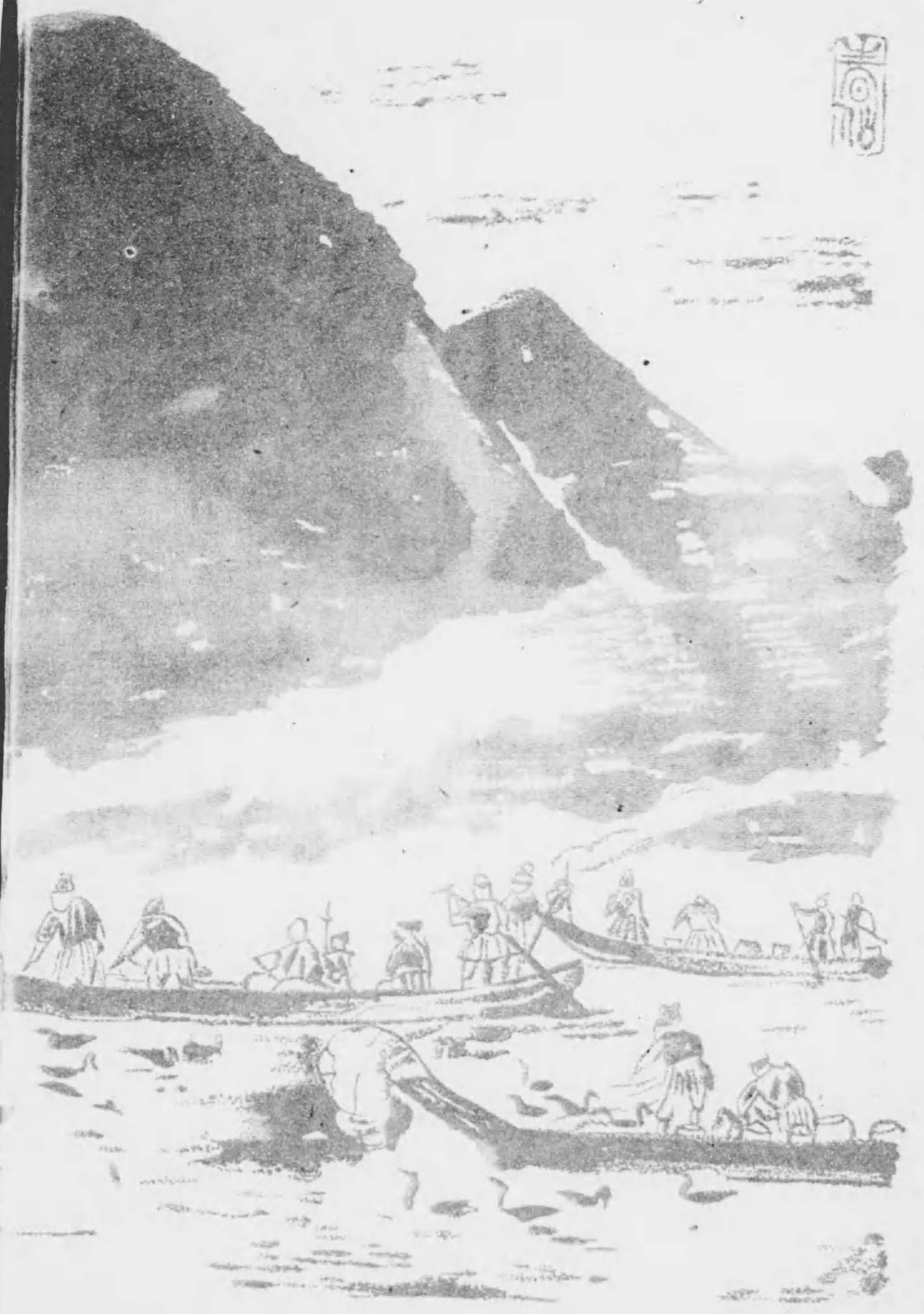


415

470



415





終

3



te